

〔書 評〕

滕軍等編著『中日文化交流史—考察与研究—』  
（北京大学出版社，2011年，386ページ）を読んで  
——今後の日中交流の手がかりを探る——

永 田 拓 治

I

著者の滕軍氏は、1955年北京生まれ。1982年に北京外国語大学日本語学部を卒業。卒業後、同大学中文学院助手を経て、神戸大学に留学。1988年に神戸大学文学研究科で修士号を、1993年には同大学で博士号を取得している。帰国後の1994年に茶道裏千家北京駐在講師、1996年に北京大学日本系講師、1997年より現職の同系副教授となる。

神戸大学では茶道の研究を行い、その研究成果は、東君の名で『茶から茶道へ』（市井社、1998年）として刊行されている。その他の著書に、『日本茶道文化概論』（中国・東方出版社、1992年）、『日中茶文化交流史』（中国・人民出版社、2004年）などがある。

なお本書は後記によれば、著者が北京大学で13年間にわたり担当する「中日文化交流史」と2007年より日中で行った実地調査がもととなっている。

本書の構成は、

序章 中日文化交流史的特点与分期

第一章 秦漢六朝時期的中日文化交流

- 第一節 海流的造化—伝通大陸文明信息
- 第二節 徐福東渡—伝授中華農耕文明成果
- 第三節 金印の証言—漢光武帝冊封倭奴国
- 第四節 女王朝貢—魏明帝頒賜親魏倭王
- 第五節 男王遣使—宋順帝詔除安東大將軍

第二章 隋唐時期的中日文化交流

- 第一節 小野丟国書—推古朝力争対等外交
- 第二節 日廷大化革新—政治經濟全盤唐化
- 第三節 晁衡与鑑真—西來仕奉唐帝，東渡授戒日皇
- 第四節 空海与円仁—成功直伝法灯，遍嘗巡礼艱辛

第三章 晚唐，五代，北宋時期的中日文化交流

- 第一節 紫式部撰書—足不出戸尽享唐物奢靡
- 第二節 奄然，寂照，成尋—身披袈裟扮演外交使節

第四章 南宋，元時期的中日文化交流

- 第一節 平清盛解除海禁—屈尊称臣换取巨額貿易利潤
- 第二節 荣西与道元—普及臨濟公案法，堅守曹洞默照禪
- 第三節 道隆与祖元—伝授時頼武士禪，激励時宗抗元軍
- 第四節 忽必烈征伐日本—民間商船仍頻繁往来

第五章 明時期的中日文化交流

- 第一節 義満建金閣—力排衆議勇開勘合貿易
- 第二節 義政藏唐物—東山御物充当日本假性貨幣
- 第三節 秀吉賜千利休—唐物鑑賞引發日本茶道誕生

- 第四節 王直居平戸—逃亡日本終被縄之以法
- 第五節 雪舟与策彦—文化名僧充任遣明大使
- 第六章 清前期の中日文化交流
  - 第一節 尚氏求冊封—閩南36姓移居琉球島
  - 第二節 清人在長崎—唐人坊里展示中国文化
  - 第三節 隠元与朱舜水—文化遺民東伝仏学儒学精髓

と、総述6篇、実地考察が29篇、詩文考察・史料考察が各1篇<sup>1)</sup>である。

序章で著者は、世界史上における日中文化交流史の特異性について、持久性・全面性・双方向性（本書では双向性）・自主性の四つの特徴があったとする。持久性とは、有史以来の人的交流が絶えず持続してきたことを、全面性とは、文学・哲学・史学・科学・宗教・芸術といった広範な文化交流が行われたことを指す。双方向性とは中国からの一方的な文化の流入のみならず、日中双方の文化交流が行われていたことであり、自主性とは、日本が中国から多くの文化を吸収しながら、日本特有の文化を生み出していった点であり、かかる特異性について読者の注意を喚起する。

このような特異性を念頭に本書は、「人員」の交流という視点から、20世紀以前の日中文化交流史を、①大陸からの移住者が日本へ大陸の文明を伝播した前3世紀から6世紀、②遣隋使・遣唐使により日本が隋・唐の政治体制を模倣して初期の国家体系を確立する6世紀末から9世紀末、③大型の貿易が行われ中国文化の影響が日本の社会生活にまで及んだ9世紀末から12世紀後半、④中国の南禅文化が伝わり日本の禅文化が生まれた12世紀後半から14世紀、⑤大量の唐物が日本へ流入し、日本独自の民族文化が開花した15世紀から16世紀、⑥中国書籍が大量流入し、日本の儒学体系が確立された17世紀から19世紀中葉、⑦多くの中国人留學生が日本へ留学し、中国の近代的な文化体系確立に影響

を及ぼした19世紀中葉から20世紀初、の7つの時期に区分し、6章23節にわたり①から⑦について詳述する。

## II

構成を一瞥すればわかるとおり、本書の内容は多岐にわたる。そのためその一々を紹介する煩瑣を避け、本書の特徴を評者の関心により四つの点から紹介したい。

まず一点目は、日中文化交流史のなかで重要な役割を果たした出来事・著名人を網羅的に取りあげている点もさることながら、史伝にその名を残さない多くの人員の交流に着目し、先行研究や日中各時代の資料を駆使し、きわめて詳細かつ膨大なデータをわかりやすく読者に提示している点である。各章各節で、日中双方の船の往来回数、交流した人員の規模、交易で扱われた具体的な物品名や数量が細かに示される。例えば藤家禮之助氏が、「元寇に始まり、倭寇、そして朝鮮の役と続く元・明間は、二千年にわたる日中の交流史において、（その底に文化的、経済的交流が通い続けていたとしても、やはり）暗転の数場面であったといえる」<sup>2)</sup>とする13世紀から16世紀の時期について、第四章第四節で、1277年から1364年の88年間に日本の商船が42回渡中したことを示し、王朝間での正式な国交のなかった元代においても、民間の交流が盛んに行われていたことを明らかにしている。同じく元代の1296年から1368年の70年余の間には、記録に残っているだけで220名の日本人僧侶が入元した、と藤家氏のいう文化的、経済的交流の側面に注目し具体的な数字をもとに人的交流を裏付ける。

つぎに二点目は、これまで日中文化交流史では扱われることが少なかった時代に注目している点である。

例えば、『第1期「日中歴史共同研究」報告書」<sup>3)</sup>「序章 古代中近世東アジアにおける日中関係史」（日本側）では、両国の歴史教科書に現れた歴史認識の差異について言及し、中国

Mar. 2014 藤軍等編著『中日文化交流史—考察与研究—』（北京大学出版社，2011年，386ページ）を読んで

の歴史教科書で中国文化が東アジア世界に伝わっていく魏晋南北朝期の東アジアの記述が抜け落ちていることを指摘している。このように、これまで中国側における日中交流史研究では言及されることが少なかった南朝宋時期の交流について、本書では『宋書』の記事を中心に、当該時期の文化交流が当時の倭に及ぼした影響、かつその後の日本に及ぼした影響について触れる（第一章第五節「男王遣使—宋順帝詔除安東大將軍」）。

三点目は、民間交流やこれまで取りあげられなかったことが少なかった地域に着目する点である。

第四章第一節では、平清盛による南宋との積極的な外交政策を皮切りに日中交流が新たな展開へと進んでいった社会的な背景として、博多で大きな勢力をもっていた宗像氏と宋の海商・謝国明とを考察対象とする。宗像氏は平重盛の依命を受け、大型商船を組織し7度の渡宋を行い、日宋貿易の発展に貢献している。また、寧波の阿育王寺の造築に際し、重盛が砂金を施舎するにあたって宗像氏がその仲介をするなど日宋関係に影響を及ぼしている。

臨安府出身の謝国明は、博多に基盤を置いた宋海商の鼻祖というべき存在であり、貿易だけでなく、花園天皇より「聖一国師」の号を賜与された円爾が入宋する全面的な支援を行うなど、宗教・文化の方面でも大きな影響を及ぼしている。

そのほか、鎖国を国是とする江戸時代に貿易窓口として重要な役割を果たした長崎だけでなく、海域アジア史という視点から注目されている琉球に節（第六章第一節）を割いているのも本書の特筆すべき点である。本節では明以降、琉球が日中交易、日中文化交流に及ぼした影響について、使節の往来・留学生の数・交易で扱われた物品などから詳しく述べる。また、「閩南三六姓」と呼ばれる福建出身者を中心としたさまざまな職種に従事する職業集団が明朝から下賜されたことや、彼らが居住した唐営（久米村）が琉球の対外貿易に果たした役割についても日中の研究成果をもとに述べる。

四点目は、これまで日中文化交流史では、負の歴史と捉えられてきた事象に言及する点である。

古代中日交流史を専攻する王勇氏は「唐宋以来の「至弱」「知礼」の日本人像は、元では「凶悪」や「好戦」にかわり、明では「狡詐」や「残忍」に変質しつつあった<sup>4)</sup>と述べている。また、『第1期「日中歴史共同研究」報告書』のなかで王新生氏は、15・16世紀の日中関係について「各自の利害、内部事情、「倭寇の侵攻」、地域貿易などの問題により、二国間には摩擦が絶えず、戦争状態になるところさえあった。「勘合貿易」を継続できなかったうえ、最終的には300年に及ぶ国交断絶にまで至った<sup>5)</sup>と、とくに「倭寇の侵攻」を括弧付きで強調している。この個々の倭寇像に加えて、文禄（1592年）・慶長の役（1597年）の2度にわたる豊臣秀吉の朝鮮出兵が、日本という国家像に重ね合わされ、より悪質なものと変化していった<sup>6)</sup>とされるように倭寇・豊臣秀吉は日中交流史において負の歴史と認識されてきた。倭寇・豊臣秀吉は、中国人のその後の日本人のイメージに決定的な影響を及ぼすものであり、これまで中国における日中交流史のなかで積極的に取りあげられるテーマではなかったといえる。

しかし本書では、この両者についてもそれぞれ節を割いている。まず、倭寇出現の社会的要因に注目し、①日中貿易が正常に機能しなくなったことにより、日中双方の商品市場に不満が高まったこと、②北九州を中心とする武士集団の失業、③1368年に開始された明の海禁政策により、海上交易を生業にしてきた中国の海商が海盜へと変質していった、と三つの理由を挙げる。

なかでも第五章第四節「王直居平戸」で、「中国海盜」である王直を取りあげている点は注目すべき点である。王直はもと徽州の塩商であったが、密貿易を行い官憲に追われ、九州五島列島に逃れ、のち平戸の大名松浦隆信の招きで平戸へ居を移す。王直は平戸で2,000人余の

配下を率い、日中間の密貿易に従事し、大きな影響力を行使する。この王直は中国において倭寇の頭目と認識されているため、これまで日中文化交流史のなかで積極的に語られることは多くなかった<sup>7)</sup>。しかし、著者は、1523年に寧波でおきた「争貢事件」以後、日明の関係が途絶し、王直のような海賊が日中の交易に影響力を及ぼし得た時代的背景に注目する。すなわち、倭寇拡大の背景には、経済的欲求から密貿易に従事する中国人商人、および日本国内における唐物への需要の高まりという日中双方の思惑があったことを指摘する。

著者は本節で倭寇が日中の関係に及ぼした負の側面が大きかったことを認めつつ、その時代のなかでも関係性を深めていく日中の文化交流について冷徹な目で見つめている。そしてこの研究姿勢がもっとも顕著であるのが、第五章第三節「秀吉賜死千利休—唐物鑑賞引發日本茶道誕生」である。本節では、日本独特の文化である茶道・能楽・華道などが形成された15・16世紀を日本の民族文化の形成期と位置づける。時はあたかも、倭寇・豊臣秀吉が登場する時代である。

著者は、日中交流史のなかでは負の歴史と認識されているこの時代にこそ、日本独自の文化が生まれる素地があったとする。すなわち、勘合貿易以来、多くの唐物が日本へ流入し、日本での唐物に対する需要が高まりをみせる。しかし、寧波でおきた「争貢事件」以後、日明の関係が途絶し、日本では唐物の慢性的な不足がおこる。このことが倭寇の活動を引き起こすのであるが、その一方で、唐物愛玩者の枯渇感をかき立て、唐物の鑑賞・研究を深化させる。鑑賞の形式<sup>8)</sup>が定まっていく過程で、手にとって鑑賞しやすい小型の唐物が重宝され、茶会の席から唐物でも大型の香炉・大型の花瓶が姿を消していく。ただ、小型の唐物が需要を満たせないという状況のなか、千利休に代表される茶人の手によって日本特有の茶碗が創作されたとする。そして著者は、日本独特の簡約で閑寂なことを尊ぶ美意識は、中国の豪華で精美なことを

尊ぶ美意識を否定することから育まれたもので、和物の価値体系は、唐物の価値体系との抗争の中から生まれてきた、と結論づける。当該時期の日中関係については、倭寇や豊臣秀吉の行為に目が奪われがちであるが、その時代のなかで唐物という媒介をめぐって日本に特有の文化であると認識されるさまざまな文化が涵養されてきたことを鋭く見通すのは、日本文化に造詣が深い著者ならではの視点といえる。

加えて、実地考察として日中あわせて29カ所の史蹟を紹介している点も、本書の大きな特徴と言える。取りあげられた史蹟は中国では西安・河北・山東・浙江・江蘇・広東等、日本では九州・関西・関東と広範囲におよぶ。かつ紹介される史蹟は著者が実際に訪れた場所であり、その詳細な紹介は、読者の理解を助けるだけでなく、興味をもった読者を実際に日中文化交流の現場へと誘う。

### Ⅲ

最後に日中交流史研究<sup>9)</sup>における本書の位置づけ、および今後の日中交流史研究、日中交流について一言述べておきたい。

まず近年の日中交流史研究について簡単に概括しておく、1995年より周一良・中西進両氏を中心に、日中約80名の学者が共同で執筆した『日中文化交流史叢書』全10巻が、大修館書店と浙江人民出版社から共同出版された。その内容は、歴史・法律制度・思想・宗教・民俗・文学・芸術・科学技術・典籍・人物におよぶ幅広い研究領域を網羅するもので、それまでの日中文化交流史の集大成ともいえるべき研究成果であった。

また2010年1月には、『第1期「日中歴史共同研究」報告書』が公表された。このプロジェクトは2006年に日中両政府の肝いりで、古代・中近世史と近現代史<sup>10)</sup>との分科会を設置し、日中歴史共同研究プロジェクトとして発足したもので、本報告書は4年の歳月をかけ達成された。これらは政治主導で行われたものではある



Mar. 2014 藤軍等編著『中日文化交流史—考察与研究—』（北京大学出版社，2011年，386ページ）を読んで

が、日中交流史研究の一里塚であるといえ、今後の研究において参照されるべき成果である。このように日中共同による大型のプロジェクトも進行し日中交流史研究は、着実に成果をあげている。

しかし一方で、大庭脩氏が藤家禮之助『日中交流二千年』について、「個人が単著で概論を書くことは甚だ困難でその例は稀」<sup>11)</sup> というように、単著による日中交流史の概論ははなはだ困難な作業であり、その成果は数えるほどしかない。まして近年研究の個別分散化が進み、専門別で記述が行われることが多いなか、本書が単著であるという点に敬意を表したい。また、留学を経験した戦後世代による著書である点も注目すべきであろう。なお、留学を経験したことによるものと思われるが、本書には、少なくとも日本の研究成果が参照されていることについても付言しておきたい。通史という性格上、必ずしも網羅的とは言えず、章節によって偏りは否めないが、本書自体が日中学術交流史のあらわれといえ、今後ますます日中間の学术交流が盛んとなり、学術レベルが向上することを期待させる。

加えて本書がこれまでの研究史のなかで評価されるべき点は、中日文化交流史というタイトルではあるが、二国間だけの視点にとどまらない可能性を秘めているという点である。

王曉秋氏は、「文化交流とは、人間社会及び各民族の文化発展の推進力というべきものである。世界ではいかなる国の文化発展でも孤立無援ということはなく、ほかの国や民族との間に文化交流を行わなければならないといえる。互いに文化の影響、補充、滲透などによって外来文化を摂取し、融合している。このような文化交流は、各国の発展及びその政治・経済・文化・科学の発展に大変役に立つだけでなく、各国人民の間に相互理解と友好関係を築く土台にもなっている」<sup>12)</sup> と述べる。

周知の如く日中の交流には、現在の日中両国だけでなく、現在の国境にとらわれないさまざまな地域・民族が関与している。しかし、中国

における日中交流史研究においては、かかる視点は副次的なテーマと認識されている<sup>13)</sup>。本書がきっかけとなり、今後は、中国でも日中両国間だけではなく、直接的間接的に関係をもったさまざまな地域・民族を含めた視点から研究が進むことを期待したい。

本書第五章・第六章で取りあげられた倭寇や琉球は、近年、日本で研究が盛んとなってきている研究テーマであるが、「現代において、倭寇に対するイメージは、日本と中国・韓国との間で大きな懸隔がある。ただ、倭寇を現在の道徳的見地から断罪するのはたやすいことだが、それでは倭寇が果たした歴史的意義を見落とす陥穽に嵌まってしまいかねない。倭寇という歴史対象を実証的に理解するためには、何よりも複眼的な視点が求められる。それは、現在の国境を越えて、共通の問題とすべき課題なのではないだろうか」<sup>14)</sup> との指摘があるように、現在の国境では議論が難しい研究対象である。また、琉球も従来は日本史の一部として扱われてきたが、近年は海域アジア史のなかで位置づけることが主張されている<sup>15)</sup>。

このような研究テーマを日中交流史のなかでいかに扱うかが、今後の課題であり、本書はその先駆けといえ、以後の日中交流史研究の方向性を示唆するものと位置づけることができよう。

最後に今後の日中関係についてふれておきたい。2010年に逝去された藤家禮之助氏は、「現在（1988年当時）、わが国と中国との結びつきは、政府レベルにおいても民間レベルにおいてもまことに深く広く、二千年にわたる交流史上の、一つの黄金時代が画然として出現したかの如き観を呈している。（中略）しかしながら、このような状況が未来永劫にわたって保証されているとは必ずしもいい難いのが歴史の常であろう。とりわけ、政治的情况はときに大きく変転する」<sup>16)</sup> と現在を暗示するかのような指摘をしている。

2012年度の日中間の往来者総数は約495万、2011年における日中間の留学生は約10.5万<sup>17)</sup>。

加えて、2012年10月1日現在の推計で、中国に在留している日本人は、150,399人にのぼる<sup>18)</sup>。また2012年度の訪日中国人数は1,425,100人と過去最高であった<sup>19)</sup>。数字のうだけでいえば、日中交流史上、空前の規模の人的交流といえる。しかし、人的交流が進めば、ますます相互理解が深まるかといえ、必ずしもそうではない。とくに2012年9月の日本政府による尖閣諸島国有化以降悪化し、内閣府が2013年9月26日～10月6日に行った「外交に関する世論調査」<sup>20)</sup>では、中国に「親しみをを感じる」とする者の割合が18.1%（「親しみをを感じる」3.6%＋「どちらかという親しみをを感じる」14.5%）、「親しみを感ぜない」とする者の割合が80.7%（「どちらかという親しみを感ぜない」35.6%＋「親しみを感ぜない」45.1%）と、「親しみを感ぜない」が「親しみをを感じる」より、62.6%も上まわる。また現在の日本と中国の関係については、「良好だと思う」とする者の割合が6.7%（「良好だと思う」0.4%＋「まあ良好だと思う」6.3%）、「良好だと思わない」とする者の割合が91.0%（「あまり良好だと思わない」36.7%＋「良好だと思わない」54.3%）と、9割以上が日中関係を良好ではないと感じていることがわかる。

軽々にこのような数字に一喜一憂するべきではないが、これは楽観できない事態といえる。2012年に日中は国交正常化40周年を迎え、あらためて想起すべきは「われわれはただひたすら子々孫々にわたって永続する平和と友好を期待し、切望し、そのために可能な限りの努力を払うことを心に誓うのみである。そのとき、もっとも必要なものは、適切な相互理解と、皮相にとらわれない、高所に立った見識」<sup>21)</sup>であるという戦争を経験した藤家氏の言葉であろう。

今後の日中交流において必要とされるのは親日・親中層ではなく、「皮相にとらわれない、高所に立った見識」をもった知日・知中層の増加である。そのためにも、年々精緻となる中日文化交流史研究の成果が学術世界だけでなく、研究書でありながら一般の読者にも理解しやす

い本書のような成果が、日中双方で出版されることを期待してやまない。

## 注

- 1) 本章を除く総述6篇と実地考察9篇が編著となるが、実質単著であるといえる。
- 2) 藤家禮之助著『改訂版 日中交流二千年』（東海大学出版会、1988）179ページ参照。なお、本書は1977年に出版された『日中交流二千年』（東海大学出版会）を補訂したものである。
- 3) 2006年10月8日、当時の安倍晋三総理大臣と胡锦涛国家主席とは、日中の研究者による歴史共同研究を立ち上げることで合意。同年11月16日に、当時の麻生太郎外務大臣と李肇星外交部長が日中歴史共同研究の実施枠組みについて協議、合意し、実施が決定された共同研究プロジェクト。
- 4) 王勇『中国史のなかの日本像』（農山漁村文化協会、2000）、209ページ参照。
- 5) 「15・16世紀の東アジア国際秩序と日中関係」（『第1期「日中歴史共同研究」報告書」第1部第2章、2010）、1ページ参照。
- 6) 前掲注（4）引用王勇書参照。
- 7) 『明史』世宗紀嘉靖三十二年の条に「閏三月、海賊汪直糾倭寇瀕海諸郡、至六月始去」と海賊と認識されている（汪直は王直に同じ）。これに対し日本では「五峰先生」と尊称される。この王直に対する日中双方のイメージのズレについては、橋本雄・米谷均「倭寇論のゆくえ」（『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008）参照。
- 8) 著者は、このような唐物鑑賞の方法を「摆饰学」と名付ける（277ページ）。
- 9) これまでの日中双方の日中交流研究については、大庭脩「序説—日本の研究者から見た日中文化交流史」・王曉秋「序説—中国の研究者から見た日中文化交流史」（大庭脩・王曉秋編『日中文化交流史叢書〔1〕 歴史』大修館書店、1995）に詳しい。
- 10) 近現代史の共同研究の詳細については、笠原十九司編『戦争を知らない国民のための日中歴史認識『日中歴史共同研究〈近現代史〉』を読む』（勉誠出版、2010）参照。
- 11) 前掲注（9）引用大庭論文、19ページ参照。
- 12) 前掲注（4）引用王勇書、45ページ参照。
- 13) 『第1期「日中歴史共同研究」報告書」序章 古代中近世東アジアにおける日中関係史」（中国側）4ページ参照。
- 14) 前掲注（7）引用橋本・米谷論文、89ページ参照。
- 15) 高良倉吉『アジアのなかの琉球王国』（吉川弘文

Mar. 2014 藤軍等編著『中日文化交流史—考察与研究—』（北京大学出版社，2011年，386ページ）を読んで

- 館，1998）・村井章介「東南アジアのなかの古琉球」（『歴史評論』603，2000）・赤嶺守『琉球王国—東アジアのコーナーストーン』（講談社，2004）等参照。
- 16) 前掲注（2）藤家書，250ページ参照。
- 17) 外務省「最近の日中関係と中国情勢」参照（<http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/china/pdfs/kankei.pdf>）。
- 18) 外務省「世界と日本のデータを見る」海外在留邦人数調査統計平成24年（2012年）参照。
- 19) 日本政府観光局（JNTO）「訪日外客の動向」参照（[http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism\\_data/visitor\\_trends/pdf/tourists\\_2012\\_np.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/reference/tourism_data/visitor_trends/pdf/tourists_2012_np.pdf)）。
- 20) 内閣府：「外交に関する世論調査」（平成25年10月調査）「日本と中国」参照。また，日本の言論NPOと中国日報社とが行った「第9回日中共同世論調査」（2013年5～7月）でも，両国間の互いに対する印象はともに2012年よりも大幅に悪化し，日本人の中国に対する「良くない印象」は90.1%，中国人の日本に対する「良くない印象」は92.8%と，いずれも9割を超え，過去9回の調査で最悪の状況になっている。
- 21) 前掲注（2）藤家書，250ページ参照。
- （2013年11月29日掲載決定）